

「運を研究する」ということ

村上 幸史¹

(大阪大学 大学院人間科学研究科)

大阪大学の村上です。今日は「運を研究する」という、これまで僕がやってきた研究のまとめのような形で発表する機会をいただきまして、ありがとうございます。先ほどの荒川さんの話から、これを言ってしまうと名前がばれてしまうのですが、僕の研究も某雑誌に投稿したところ、「あなたの研究は応用ではない」とリジェクトされたことを思い出しました(苦笑)。

冗談はさておき、逆に自分の研究テーマは心理学の極にあるような、誰もやらないような、くだらないことであると自負しております。それで今日の発表者として呼ばれたのではないかと思います。よろしく願いいたします。

さて、まずはじめにこちらをご覧ください。例えばマンガであったり、新聞の記事であったり、これは今日は名古屋での発表だったので、中日の落合監督の記事を探してきた訳です。これは今年の試合で「勝ち運がなかった」と試合を振り返って語ったことを記事にしたものですが、研究対象となるのはこの意識され、語られる「運」や「ツキ」です。

先に「幸運な」あるいは「不運な」事象や現象について説明しておきたいと思います。語られる事象や現象が心理現象として興味深い理由は、仮に事象や現象と人とを分けて考えたとすれば、事象や現象それ自体が「幸運」なのではなく、何が「幸運」と判断されるのかという、「幸運」や「不運」は人の価値判断と切り離せば価値のない現象であると思えるためです。発表者が主観にこだわる理由はここにあります。

例えば、ルーレットを回して赤の色に玉が止まった時を考えた場合に、それを赤と見るのか、当たりと見なすのか、「幸運」と感じるのかはそれぞれ異なることを指していると考え

¹現所属 神戸山手大学 人文学部

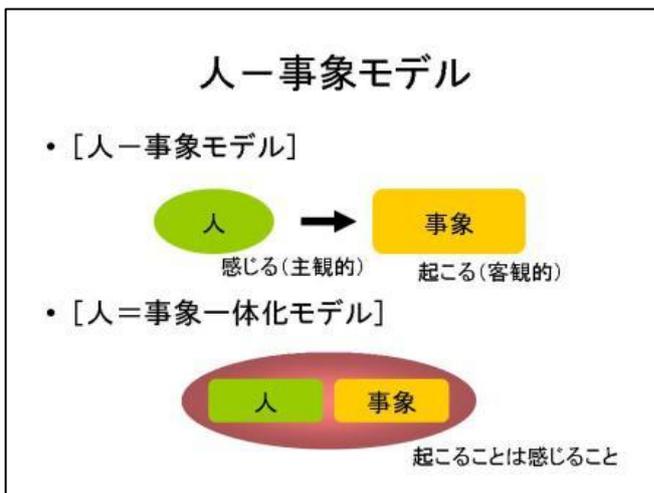
えられます。また以前にあった面白い例として、プロ野球では秋に新人獲得のドラフト会議というものを開催する訳ですが、獲得したい選手が重なった場合には抽選でクジを引くことになっています。日本ハムの監督は外国人のヒルマン監督だったのですが、彼はクジに書いてある当たりが読めなかったそうです。このようなルールがあたり、それを理解していない場合には、当たりであっても「幸運」という感情は生じない訳です。

矛盾するかもしれませんが、「運」と結びつけられやすい事象の性質自体も興味深いテーマであり、検討可能であると思われます。これには事象に斉一性の仮定を置くことができるという条件が付くと思いますが。例えば確率論との絡みから、客観的に見て偶然性を越える生起事象には、イカサマや回帰現象のような何らかの因果的な価値があると考えられます。例えば占いの的の中は期待水準も低いし、偶然性を越えない訳です。ただし今回は直接関係がないため省略したいと思います。

事象と現象の区別

ここで発表中における事象と現象を区別しておく、事象 (event) は試行の結果客観的に生起したとみなせる事柄の意味で用いています。これに対して、現象 (phenomenon) は事象の束や場といった全体性から派生して、立ち上ってくるような、より主観的な事柄を指しています。ルーレットの出目は事象であり、「幸運」やゲシュタルト的な「ツキ」は現象であると言えます (右図参照)。

以上のことから、一般的な説明としては客観的な事象とそれに対する主観を抱く人を分けて考える [人 - 事象モデル] が理解されやすく都合は良いと思われます。ただし、人の知らないところでルーレットの目が出るなどの、そもそも人が関わらない事象に意味があるのかと考えた場合や、後で述べるように「ツキ」を事象と一対一で対応させることができるかどうかは疑問でありますので、全てを現象として捉える [人 = 事象一体化モデル] の方が実は良いかもしれないとも思っています。



また「運」と「ツキ」は厳密には分けて議論すべきものかもしれませんが、どちらかとい

例えば「運」は偶然という性質そのものを指していて、強さやよしあしなどの付随する語句で用途は変化します。これに対して「ツキ」は人に関する状態的な変化を指しており、さらには憑きもののように超自然的な力の意味で用いられたりします。

ただし「運」や「ツキ」の意味は人や用いられる文脈でも異なると考えられます。後で述べるしろうと信念から見る「運」や「ツキ」に注目しているのは、このためです。語られる側に立ったものが重要であるとすれば、用いられ方に着目する場合の「運」や「ツキ」は厳密に分けられないことも多いのではないかと考えられます。

「運を研究する」スタンス

次に、「運を研究する」スタンスについて説明したいと思います(右図参照)。まず研究する立ち位置として、非合理的とされる現象に関する研究のスタンスはいくつか考えられます。以下はその代表例です。

まず非合理とされる現象やそれに関わる者の非合理性を科学的な立場から暴く、いわば否定のための科学的な研究があります。例としては超能力(ESP)実験を否定するための研究です。少なくとも現象自体を否定することが目的の研究になります。

次に非合理とされる現象やそれに関わる者自体について、科学的な立場から、科学的な手法を用いて研究によって明らかにする研究があります。占いがなぜ当たると思うのかのメカニズムを解明しようとするのはこれに該当します。

3番目として、仮に科学的な合理性からかけ離れたものであったとしても、実証するという軸とは独立して、それを「合理的に」検討する、つまり理解するための研究があると考えられます。僕が興味を持っている「運」や「ツキ」のしろうと信念や語りの収集というのはこれに当たる訳です。

一柳(1994)が指摘するように、超能力の研究を始めとした非科学とされるものの近代的なアプローチは、実験や仮説検証という科学的な方法論を取って現象自体を立証しようとする、つまり始めに挙げた立場になります。非科学の近代的なアプローチは「科学的」な訳です。科学の真偽の境を方法論に置くと、超能力のような現象が否定されるのは、手

研究する立ち位置

- 非合理的とされる現象研究のスタンス
 1. 否定のための科学—非合理とされる現象やそれに関わる者の非合理性を科学的な立場から暴く
 - 超能力(ESP)実験の否定
 2. 非合理とされる現象やそれに関わる者自体について、科学的な立場から(手法を用いて)明らかにする
 - 占いがなぜ当たると思うのかのメカニズム解明
 3. 科学的な合理性からかけ離れたものであったとしても、実証軸とは独立して、「合理的に」検討する
 - 「運」や「ツキ」のしろうと信念や語りの収集

続きの不備や再現性の問題となると思われます。

このような背景から、いずれの立場を取った場合でも、「運を研究する」ことが客観的な立証を目指す研究、いわばオカルト的な研究と誤解されやすいことがあります。また始めの立場は实在論を、初めと2番目の立場は実証を重視していると思うのですが、3番目の立場を取ることは、このような实在論や実証を重視する他の研究者との会話においても、しばしば障害を生じさせる点だと思えます。

1番目と2番目のスタンスと3番目の違いは、主観と客観の兼ね合いにあると考えています。1番目は主観を否定するために現象自体を客観的に否定するものであり、2番目は主観を否定する訳ではないですが、それを支える客観的なメカニズムを立証しようとするものです。これに対して3番目のスタンスは主観そのものを捨てるのが目的になります。僕自身の主眼は3にあります。もう少し説明すると、この立場に立つと、まず要因としての「運」や「ツキ」が客観的な事象に及ぼす効果の立証が目的ではありません。また、第二に「運」や「ツキ」自体を否定することでもありません。言い換えれば「運」や「ツキ」がなぜ生じるのかではなく、どのように生じるのか、感じるのかを検討することにこそ研究の価値があると考えています。

例えば「運」が良くなる方法ということを考えてみます。「願った時に得たい事象や結果を得る」のような意味での、結果の偶然性をコントロールする直接的な方法は非現実的でしょう。代わりに「運が良い」と感じる方法なら可能であるかもしれませんが、それは結果を変えるのではなく、事象と人の関わり方を変えているだけと言えます。いわゆる「運の啓蒙本」はこのたぐいの手法に入れることができると思えます。

このようなスタンスで検討の対象となるのは、「運」や「ツキ」と共に浮かび上がってくるような事象、それに関わる者や行為という現象それ自体です。意識される「運」や「ツキ」や、そう呼ばれる対象があることは、肯定/否定という軸上で問題視することとは別物であります。また「運」や「ツキ」自体が現象に名付けられた概念名でもあるとすれば、立証されるものでも、立証できるものでもないと思えます。

もう一つここで述べておくと、こちらが調査者や研究者というスタンスに立って「運」を語ってもらう場合に障害になるのは、多くの調査対象者に、その語り自体を「合理的ではないものを自分自身が語っている」と判断される点です。

例えばこちらが「合理的な意見を求めている」ように思われたり、「非合理的な思考を批判する材料を集めるための調査をしている」と誤解されることで、対象者に構えが生まれ

ることが多々見られます。以前、うちの大学で競技カルタをしている人に話を聞こうとしたところ、そのような誤解がありました。

「運」や「ツキ」には、もともと他では説明できないことをとりあえず説明しておこうという意味合いがあります。これは消極的な説明ですが、このような消極的説明をする場合に「運」や「ツキ」は単なる便利な道具であるのに対して、積極的な姿勢で用いる場合に返ってくる反応は、第一に非合理的や非科学的な思考であったり、第二に責任逃れの発言であったりなどおおよそ好意的なものではないと考えられます。

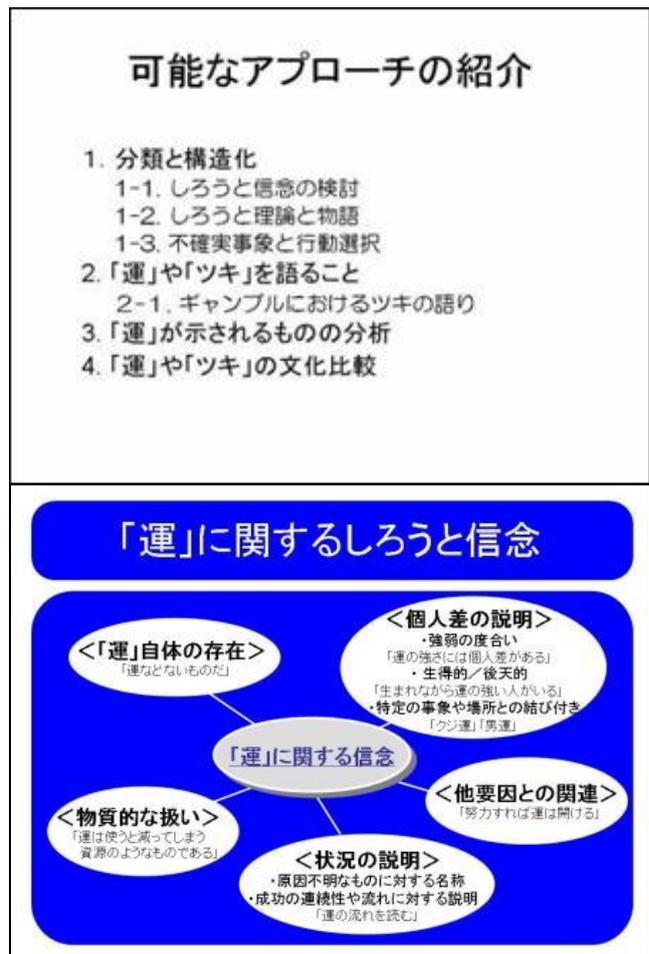
実際のところ、19 ページに挙げた研究スタンスの分類に対応して、語り手の意識も科学的に全面に否定する立場、これは客観を主観よりも極度に重視する立場、「幸運」な経験があることは認めるが、別の科学的メカニズムを求めて、現象自体は半信半疑な立場、これは主観よりもやや客観よりの立場、そして積極的に「運」や「ツキ」を肯定する立場、これは主観を客観よりも重視する立場に大きく分けられると思います。

「運」や「ツキ」の研究で可能なアプローチ

次は、「運」や「ツキ」の研究で可能なアプローチについて説明したいと思います。大まかな話の流れを説明すると、このような感じになります（右図参照）。

分類と構造化

まず第一に分類と構造化ということですが、「運」を研究するアプローチとして可能なのは何だろうかということを考えると、先述したオカルト研究との区分・対比からも、主観だから何でも良しという訳ではありません。そこでまず考えられるのは分類すること、そしてその特徴から構造化して示すことです。これは真理や立証ではありませんが、類似項や同一性を仮定する意味で、科学的な方法論を借りていると言えま



す。この意味では「示すこと」というのは科学なのかもしれません。もう一つは記述することだと思えます。ただしこれらは予測的な価値を必ずしも持つ訳ではありません。

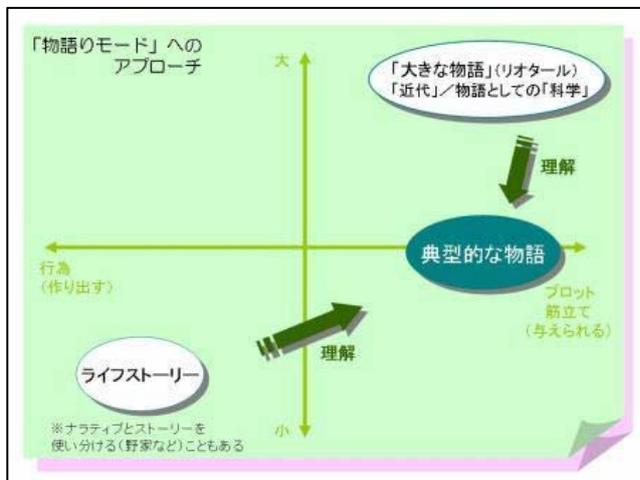
例を出すと、小泉前首相やジーコ日本代表監督は「強運である」としばしば報じられていました。「強運である」ことは具体的な事象のエピソードを理由付けとして語られる訳です。ここからは語り手の状況となぜその事象群が「強運」と結びつけられるかという人の判断を読み取ることができます。この「強運な者」というのは特性論的なアナロジーであり、特性と結び付けられる判断材料となる背景については分類や構造化することは可能であると考えられます。

このような人の判断の元になっているのは、一般にはしろうと理論と呼ばれるものです。これまでに「運」や「ツキ」に関するしろうと信念を集めて、その分類を行ってきました。運に関するしろうと理論はこれに示すように、運自体の存在の有無に関するもの、個人差を説明するもの、アナロジーとして物質的な扱いがされるもの、状況の説明に用いられるもの、他要因、例えば努力などとの関連性などに分類ができます。

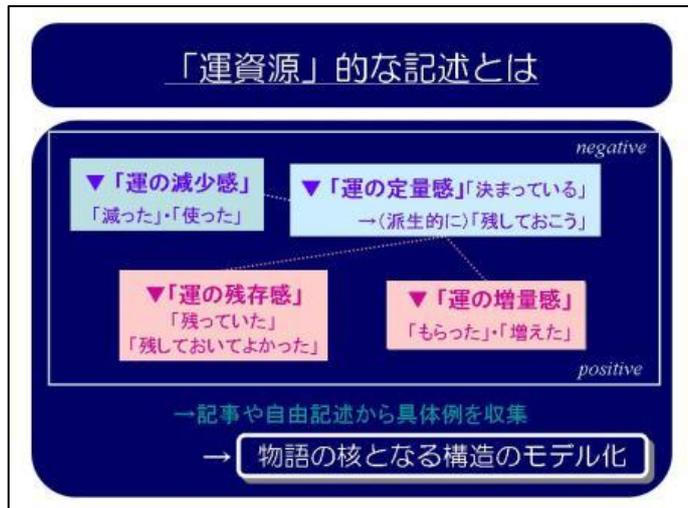
続いて挙げられるのは、このようなしろうと信念から発展して、しろうと理論と物語構造を捉えようというものです。個人や複数の語りを検討したり、あるいは時間や空間の視点から、マスターナラティブ、いわば「大きな物語」的に、一つの物語構造を捉えるなどの方法が考えられると思えます。このようにしろうと信念自体が物語構造として捉えられるのは、それを支えるしろうと理論がもともと因果的な構造だからです。アナロジー的に意味や構造が類似するという仮定の上に、その信念自体を支える論理構造を捉えることが可能であると考えられます。

「運資源物語」の構造

例として、ここでは「運資源物語」の構造を捉えようという試みについて紹介します(右図参照)。論理実証モードでは「運」についての語りは真偽の軸で語られ、真の理由に対して俗信であったり、ジョークであったりします。これに対して物語モードは物語の大きさの軸と、語る行為自体か、その内容や筋立てであるプロットに焦点を



当てたかが問われると考えられます。ライフストーリーなどは個人という小さな範囲で、かつ行為に焦点を当てていると思われ
ます。これに対してリオタールのいう
「大きな物語」は、その通り近代や科学など大きな適用範囲を物語と呼んでいるものです。これからお話しする「運資源物語」はプロットよりの、大きさとしては中間的なものを想定しています。物語の構造を時間軸で組み立てて、それをライフストーリーや「大きな物語」からも理解しようという欲張りなものです。



ここでまず「運資源物語」に用いた「運資源」的な記述について説明します。これは「使った」や「減った」などの「運の減少感」を示すもの、「残っていた」などの「運の残存感」を示すもの、「もらった」や「増えた」などの「運の増量感」を示すもの、そしてこれらの核となっていると考えられる「決まっている」、あるいはそれから派生した「残しておこう」という「運の定量感」の記述が挙げられます。これらは新聞や雑誌の記事、自由記述から集めたもので、物語の核となる構造をモデル化しようとするものです。

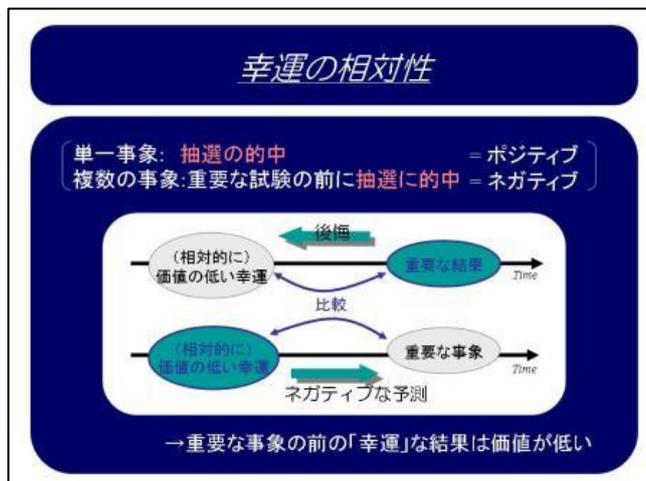
例としてここに挙げたのは「運が減った」とか「使った」と感じた経験の例です。これらは大きく分けると巨大な抱えきれないほどの「幸運」と、つまらない「幸運」からなるのですが、このようなことをいつ感じたかを時系列に並べると、「幸運」な事象の後か、それとも「幸運」な事象を得て失敗した後かという両方であることが分かる訳です。



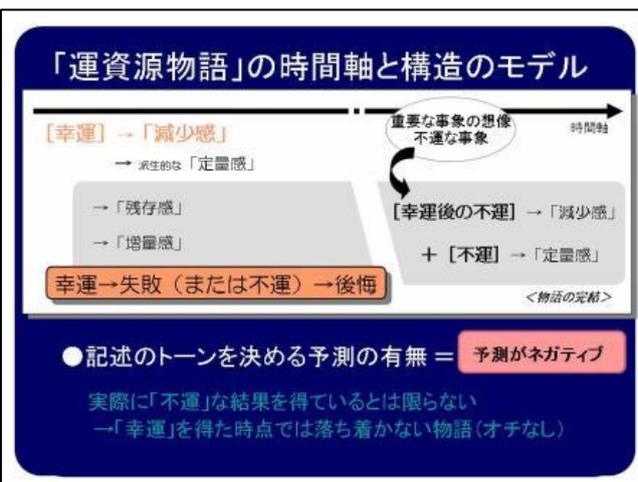
ここで一つ考えられるのが、人は複数の事象を相対的に比較しており、「幸運」の価値はその比較で決まっているのではないかということです。例えば抽選で的中したことは単一事象としてはポジティブであっても、重要な試験の前で抽選に的中したことはネガティブ

になる場合があるということです。

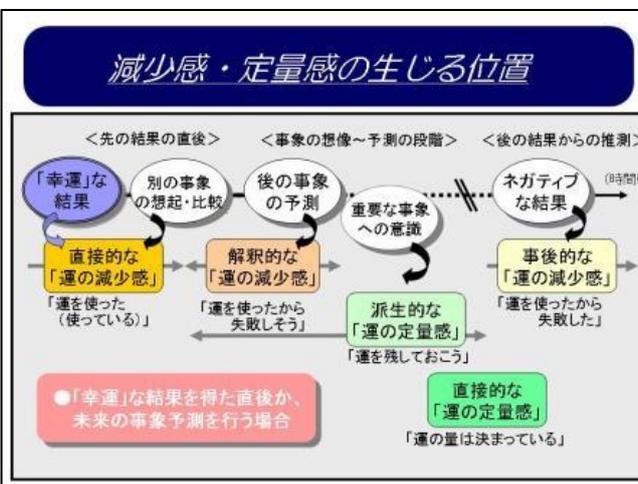
これは図で説明すると、重要な事象で失敗した場合にはその前の事象、それよりも相対的に価値の低い「幸運」を得ていたことと比較されて後悔が引き起こされたり、逆に「幸運」を得た直後では、後に控える重要な事象に関してネガティブな予測、つまり「つまらない幸運を得たことで、重要な事象で失敗する」ということを考えるのではないかということです。これをまとめると重要な事象の前の「幸運」な結果は価値が低いということが考えられます。



詳細な分析については時間の関係で省略しますが、以上から「運資源物語」の時間軸と構造のモデルを示せば、以上のようになると思います。かいつまんで言えば、「幸運」を得たことで失敗、あるいは不運な事象を経験し後悔するという物語の構造です。これらの記述のトーンを決めているのは予測の有無であり、ネガティブなのは予測です。例えば「宝くじで1億円当たった」の時点で終わればいいのですが、「幸運」を得た時点では落ち着かない、いわばオチのない物語になっている訳です。もちろん、実際に「不運」な結果を得ているとは限らないわけですが、



特に「運の減少感」はしばしば語られやすい訳ですが、これらをさらに区別すると、「幸運」な結果を得た直後や別の事象と比較して「幸運」を感じている場合、例えば九死に一生を得たなんていうのが



そうですが、これらは直接的な「運の減少感」と言えます。これに対して後で生じる事象を予測する場合の「運を使ったから失敗しそう」というのは解釈的な「運の減少感」と呼べるでしょう。またしばらくしてネガティブな結果を得た場合に、先の「幸運」と結び付けられて「運を使ったから失敗した」という原因帰属は事後的な「運の減少感」と区別できると思います。

さらには先に挙げたしろうと信念は、不確実な事象の選択に影響していると考えられます。例えば「運が強い」と思っている人は、偶然に生起する事象の可能性を高く見積もるという Wiseman の研究があります (Wiseman, 2002)。これは "Luck Factor" というベストセラーで、昨日気付いたのですが邦訳も出ているようです。興味のある方はご覧ください。

このように判断や実際の選択との関係を検討しようとする研究がある訳ですが、ただし、先ほど説明しましたように、見積りや選択に影響を与えたとしても、成功を実際に得る訳ではないことに留意をしていただきたい訳です。このような研究は実証的であり、先の2番目のタイプの研究、つまり科学的な手法を用いて明らかにするものに該当すると思いません。

また何の要素が「運」や「ツキ」と結び付けられるのかという認知心理学的な研究は実際にあるのです。代表的なのは Teigen による一連の研究です (e.g., Teigen, 1995; 1999)。先ほど「運」の相対性の話をしましたが、Teigen は論文の中で「もし~だったら」という反実仮想、英語で言うと counterfactual thinking なのですが、この想像が「運」、つまり luck の認知しやすさと関連していることを示しています。

「運」や「ツキ」の語りを分析することの意味

次に「運」や「ツキ」の語りを分析することの意味について考えてみたいと思います。

・使われ方を文脈と共に探ること

まず一つ目は、その「使われ方を文脈と共に探ること」にあると考えています。先ほど述べたように「運」や「ツキ」として語られている事象や現象も、実際はこれらの言葉が便利な道具であるために用いられているのであって、何かを指していても説明している訳ではない場合があります。

その点で焦点が当てられるのは「運」や「ツキ」の用いられ方です。例えば現象全体を指しているのか、現象を構成する要素を指しているのか、つまり「運」や「ツキ」を原因として生じたとされることなのか、偶然性などの事象の結果を指しているのか、その結果

に対する関与性、つまり原因帰属などを指しているのかであると思われます。

・指しているものが実は語りえないものを語っている場合

二つ目は、「指しているものが実は語りえないものを語っている場合」についてです。まさに運や「ツキ」としか呼ぶことができない現象自体を説明したいが、語れない場合があると思われます。それは語ることが不可能や上手く語れない場合であったり、そのような言葉を持ち得ないためかもしれません。

例の一つとして、ここではギャンブルにおける「ツキ」の語りについて話をしてみたいと思います。以前行ったもので、麻雀というギャンブルというよりゲームですが語りの分析を試みたことがあります。これには目的が三つありました。一つは「ツキ」という概念を用いることによってどのような形で、事象の連続性が説明されているのかということで、Gilovich という人ら (Gilovich, Vallone, & Tversky, 1985) の分析した "hot hand" に近い概念です。二つ目として「ツキ」として語られている現象は何だろうか？単なる結果なのか？という点です。これについて語り方と再構成の方法に着目しました。三つ目は結果的にあまりうまくいかなかったのですが、個人ではなくその場ということに着目して、共有されている「ツキ」に関する物語について、「ツキ」と「ツキの流れ」ということから探ろうとした訳です。

例の二つ目として、自己の「ツキ」についての語りをまとめたものを紹介したいと思います。そこでは自分の手、自分の上がり、ちょっと麻雀というゲームのルールについてご存知でない方には申し訳ないのですが、基本的にカードゲームと類似していて、相手に分からないように自分で手を作って、誰かの上がりを決めていく。これを規定の回数繰り返すことで、総合的な勝ち負けを決めていく訳です。この上がりというのは、小さなゲームでのゴール、小目標のようなものだとお考えください。他に自分の行為、全体的な結果や現在の評価、自分の状態や過去の感情、他者の上がりや行為に分類されました。

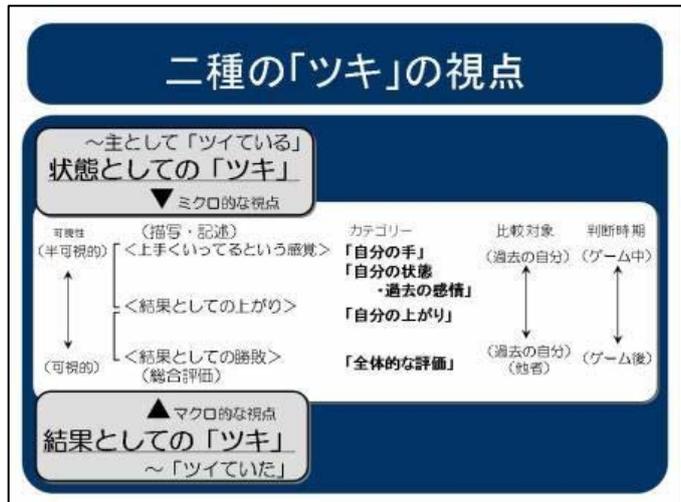
ここで考えてみますと、「運」や「ツキ」と結びつけられるものとは何らかの事象が挙げ

自己の「ツキ」についての語り

- [A 自分の手] 配牌/ツモ/上がった牌/チン/ハイ/葎の状況/ドラ
(例)「次は赤引いてきたから」「結構、配牌で揃ったのが揃わなくなったんで」
- [B 自分の上がり] ツモ/役/点数/他者からの上がり/特別な上がり/ドラ
(例)「一番最初の観倍ですね」「そこで1000点しかあがれなかったけど」
- [C 自分の行為] 「なくこと」/リーチ/失敗/他者に「振り込み」したこと
(例)「チットイでリーチをかけたんやな」「自分から捨てましたけど」
- [D 全体的な結果・現在の評価] 行為への評価/ツキの判断/結果の評価/上がり振り込み回数
(例)「結局あの一発だけでやられたなという」「基本的に今回、何にも」
- [E 自分の状態・過去の感情] 過去の感情の回顧/過去のツキの判断
(例)「追いつかれへんわという感じがあったけど」「最後、来た一と思った時、」
- [F 他者の上がり・行為] 他者の手/他者の上がり/他者の行為
(例)「コツコツと削られていったんで」「こちにきれい」に止められとって」

られます。先ほど上がりや勝ち負けと言いましたが、全体的な勝ち負けなどの大きなものだけでなく、ギャンブルなどでの局面などの小さなものやサイコロの転がり方のような結果未満のものもあります。また事象そのものではなく、それに関わるものとして自分自身や相手の行為、場そのもの、思考の相対性、「慣れ」などが挙げられます。

そこで考えられるのは、語りには大きく分けて二種の「ツキ」の視点があるということです。対比して述べれば、まず状態としての「ツキ」です。これはミクロ的な視点であり、主として「ツイている」という形で描写されるものです。具体的には上手くいってるという感覚を先に挙げた、自分の手や自分の状態や過去の感情をゲーム中のこととして語るようになります。これに対して結果としての「ツキ」があります。こちらはマクロ的な視点であり、



「ツイていた」という結果としての勝敗が総合評価としてゲーム後の視点から語られる訳です。全体的な評価がこれに該当します。もちろん、語りは全て事後的なものです。視点が異なると思えます。

このようなことから、「運」や「ツキ」が生じる場には、ギャンブル、試合などの勝ち負けが生じる状況、人生の局面などがありますが、これらは事象の束であり、不確実性が高い状況です。よく「人生はギャンブル」に例えられますが、しろうと理論が語られやすい状況であると言えます。

語られたり記述されたりするものを分析するという観点からは、「運」や「ツキ」の研究は語用論や言語学に近いイメージを持たれるかもしれませんが、ただし概念や用法としての「運」や「ツキ」だけを取り出すことは可能でしょうが、問題もあると思います。つまりゲシュタルト的な現象を分解して示したり、一般化された「運」や「ツキ」を理解すること、つまり還元化することで、事象や現象、場などと切り離せないような最も興味深い主観の部分の削ぎ落とす場合もあるので、発表者自身は言語の研究ではないと考えています。

また現象を理解する目的があるとすれば、「運」や「ツキ」の研究とは現象を理解する目的では文化人類学に類似した試みかもしれません。現象の体験を語ることで語られるもので共有されるものやされないものがあり、共有されるものについては言語システムのよう

なもの、つまり語り方や要素に特徴があることをある種調べようとするものとも言えます。ただし先に説明したように、言語を用いて語ることが不可能である現象、つまり「語りえないこと」であるとすれば、語りを言語によって理解することに価値はないのかもしれない。

以上のことから分かるのは、例えばどのような行為や事象が「運」や「ツキ」を感じさせるのか、あるいは「運」や「ツキ」を感じる場合にはどのような感情を伴うのか、などの要素還元論的なアプローチは確かに可能であり、理解の一助になると考えられます。ただしこのようなアプローチは両刃の剣であり、ゲシュタルト的な現象として捉えられているような「運」や「ツキ」を分けやすい単位で分解して示したり、一般化された「運」や「ツキ」を理解することに価値があるのかどうかは、「予測」を目的とする立場でなければ不十分かもしれません。

「運」が示されるものに関する分析

次に、「『運』が示されるものに関する分析」に関してです。何が「運」と関わる事象なのかについては、個人的な問題だけではなく、社会・文化的な影響があると考えられます。そのため我々が「運」と捉えていたり、「運」が関わっているものを探る手がかりとして、メディアや流布するモノなどを検討しようというものです。例としてはこのような分析をしている訳ですが、例えば占いの文章提示の構造やそこで提示されている「運」の分類があります。女性誌の占いには「恋愛運」が必ずあります。ここから僕は「個別運」と呼んでいるのですが「運は事象別に分けられている」ということと、「運命はある種決まっている」という運命の生得観が根底にあることが分かる訳です。次にいわゆる「幸運グッズ」の広告を分析すると、「幸運」の道筋には二つあり、「幸運グッズ」で宣伝するのはネガティブな状態から、ポジティブな状態へという飛躍的なものであることが分かります。また、これはここにおられる荒川さんとも一緒に研究をさせてもらっているのですがお守りの種類やポクポン、これはタイからの輸入らしいお守り人形なのですが、あとおみくじなどの分類をしたりしています。

このようなモノや内容は、商業主義と結びつくため、科学的には真偽を問うべきものかもしれません。ただし「運」を研究する立場からは、どのようなことが「運」と関わり、またその価値が高いかを知ることができると考えられます。

アプローチとして最後に「運」や「ツキ」の文化比較が挙げられます。上で挙げたしろ

うと信念に口承伝統的、あるいは因果応報的とも言えることわざ的な要素があるとなれば、文化や社会間で類似したしろうと信念がある場合と、何を「運」や「ツキ」に、あるいは偶然に捉えたりするのかが異なっている場合が考えられます。

例えば、日本での「運」は偶然性だけではないように、欧米では偶然性を指す chance とスキルの意味を含んだ luck は区別されていることが Keren と Wagenaar の研究から分かっています (Keren & Wagenaar, 1985)。また luck と言えばイスラム圏では神を指したり連想する場合もあったり、インドなどでは生得的な運命を指す場合もあると考えられます。

このような点からは「運」や「ツキ」そのものではなく、その概念の背後にある社会的・文化的なものについて、何が説明に用いられるかという語りや現象を分析することから把握することが可能だろうと思われます。これは「運」や「ツキ」から、偶然性の価値を探ろうとする試みでもあります。

「運」や「ツキ」を研究することとは何にあたるのか

最後に「運」や「ツキ」を研究することとは何にあたるのかという研究の位置付けについて、簡単に話をして終わりたいと思います。つまり心理学や科学とは何かという問題になると思います。

方法論の問題としては、「運」や「ツキ」の研究では、実証することを目的にしている訳でもないし、人を生物と見なすモデルを用いている訳でもない。また役に立つというテーマでもありません。この役に立つという論理についてですが、基本的には求められるもの、つまり直接的な効果に対しては応えられない気がしています。それは、偶然な事象での成功を得る研究ではないからです。声高に「幸運」を得る一般的な効果を強調するのであれば、これは疑似科学的であると思います。

以上から、「運」や「ツキ」の研究は現在の心理学の領域には、残念ながらというか入れてもらえないのではないかなとは思っています。科学 - 非科学という軸ではなく、脱科学の道を目指すべきなのかとも思いますが、示すことや論理を科学の価値となれば、科学的な研究かもしれないということは荒川さんからご指摘をいただきました。特に心理学の枠にこだわることもないのですが、こういうことから逆に心理学の定義とは何だろうかと感じることがあります。

あえて「運」や「ツキ」の研究の目的を考えると、予測ではなく理解するための研究と言えるでしょうか。これには一般化と共有ということをはけて考えたいと思います。一般

化して予測に用いることができるということも研究の一つの意義ですが、理解することを目的として、それを共有することも一つの目的ではないかと思えます。

長くなりましたが、以上で話題提供を終わらせていただきます。いろいろ説明不足の箇所があったと思いますが、それはまた質疑などでお答えしたいと思います。ありがとうございました。

引用文献

- Gilovich, T., Vallone, R., & Tversky, A. (1985) The Hot Hand in Basketball: On the Misperception of Random Sequences. *Cognitive Psychology*, 17, 295-314.
- 一柳廣孝 (1994) こっくりさんと千里眼 : 近代日本と心霊学 講談社メチエ
- Keren, G. & Wagenaar, A. (1985) On the psychology of playing blackjack: Normative and descriptive considerations with implications for decision theory. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 133-158.
- Teigen, K. H. (1995) How good is good luck? The role of counterfactual thinking in the perception of lucky and unlucky events. *European Journal of Social Psychology*, 25, 281-302.
- Teigen, K. H. (1999) Good luck and bad luck: How to tell the difference. *European Journal of Social Psychology*, 29, 981-1010.
- Wiseman, R. (2002) *The Luck Factor*. Century. (矢羽野薫 (訳) 運のいい人、悪い人 : 運を鍛える四つの法則 角川書店)